

「主イエスの死」

2016年01月15日

ルカによる福音書 23章 44節～49節。既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちは遠くに立って、これらのことを見ていた。

主イエスが十字架につけられ、昼の12時頃になった。すると、太陽の光が失せ、全地は暗くなり、3時まで続いたという。この表現は自然現象ではなく、メシア・キリストの苦難と死を「暗黒」として神話的に著した言葉であろう。更に「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた」と書いている。エルサレム神殿の至聖所には、契約の箱が置かれ、垂れ幕で仕切られていた。垂れ幕の中には、大祭司が年に一度、執り成しの血を注ぐために入ることができた。それ以外には決して入ることができない、神と人とを隔てる幕であった。この垂れ幕が真ん中から裂けて落ちたということは神と人とを隔てる幕が無くなったという象徴である、主イエスの十字架によって罪が赦され、神と人とが直接結び合うことができたというメッセージである。

この福音を、ヘブライ書 10章 19節、20節で「それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです」と書いている。主イエスの十字架は人の罪を不問にし、神の中に招き入れてくださった（インマヌエル）救いであった。主イエスは、苦悩のただ中で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と大声で叫び、息を引き取られた。

四つの福音書は、十字架の上で主イエスは七つの言葉を発せられたと記している。マタイとマルコ福音書が伝えている「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉は主イエスご自身の言葉ではないかと言われているが、他の言葉は著者たちが書き加えた言葉であると思われる。ルカは、神に託された使命を全うし「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と満足して委ねた主イエスの思いを代弁している。主イエスは激痛と苦悩の中で、生涯を終えられた。聖書は、主イエスの十字架に人間の救いが成就したと伝え、教会は十字架への信仰に立って、罪の赦しの福音を宣べ伝えてきた。

主イエスの死刑執行を担当したローマの百人隊長は「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。異邦人による最初の「キリスト告白」とされているが、彼は主イエスの十字架の死に至るまでの全てを見て、罪を背負って死にゆく「義人」の姿に感動したのである。十字架の下には、大勢の群衆が見物に集まっていたが、彼らも、罪のない主イエスが残酷な十字架で殺されたのを見て、胸を打ちながら帰って行った。

主イエスを知っていた人々と、ガリラヤからついて来て、宣教団に奉仕してきた婦人たちは遠くに立って、胸が張り裂けるような悲しみで見えていた。強大な権力の下では、主イエスの人を生かす愛と真実は無力に思えたであろう。しかし、彼女らによって、主イエスの復活が証言された。十字架は喜びに転換されていく。